

俺は仮面ライダーサ
ソード

サザビーン

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

気がついたら赤ん坊になっていた青年、そして女尊男卑の世の中でも必死に生きてく物語。

目次

俺のペットがサソードゼクターになって

た

1

俺のペットがサソードゼクターになつてた

気がついたら俺は赤ん坊だった。は？俺は家で仮面ライダーカブト見て寝たはずだ。ん？寝た？じゃあ、これは夢か！俺って天才。ここ最近s s ばっかり読んでたからな。そうときまれば、てから覚めるだけだ。そして、俺は目を閉じ夢から覚めるろと何回か念じ目を開けた。そして、目の前には女の人の顔があつた。

『ママですよー』

俺は考えるのをやめた。

〜七年後〜

俺が転生？してから七年が過ぎた。そして今実の母親に虐待されている。何故か？俺が男だかららしい。解るやつは解ると思うがここはISの世界だ。一年位前にみんなご存知白騎士事件がおきて、女尊男卑な世の中になってしまった。そのせいで学校では男子がいじめられている、俺も何回かあつた。その時、ハサミで切らそうになつたので相手の足を蹴ったら俺が怒られた。そしてたまに母親と姉たちに蹴られたりする。だが、

『もう、やめろ』

いつも父親父がとめてくれる。そして、クソババーは舌打ちして何処かへ行く。

『大丈夫か?』

『大丈夫だよ。ありがとう父さん』

『俺の部屋でマリオ遊ぶか?』

『うん!』

そして、俺は親父とマリオを一晩中遊んだ。これが俺にとっての日常だった。

〜五年後〜

俺が中学に上がるころ親父が死んだ。死因は過労死だった。俺は親父が倒れて、入院している病院に学校を休んでお見舞いに行った。そして、俺の結婚式に出たかったと言つてこの世を去つた。この時病室にいたのは俺だけだった。そして、親父というストッパーが居なくなつたせいで俺への虐待はエスカレートした。その結果、前日俺の腕が折れた。

今、俺は静かな病室で虫籠にいる俺と親父のペットの蠍を眺めている。この蠍は俺と親父が殺されそうなどこを助け保護し、クソババーには内緒で飼つてきた。俺のもう一人の本物の家族だ、ちなみに名前はない。

『俺の家族はお前と親父だけだよ』

俺は蠍に向かつて呟いた。もしたら、まるで俺の言葉をわかったかのように俺を見つめた。まさかな。

数日後、俺は退院した。俺が入院したのが気に入らなかつたようで俺への虐待はまたまたエスカレートした。そしてある日クソババーどもはアイツを見つけた。俺がトイレに行つてる間、俺の部屋から笑い声が聞こえた。俺はすごく嫌な予感だったので部屋に走つて向かつた。そして俺は絶望した。俺の部屋には殺虫スプレーを持ったクソババーとクズ姉二人の三人と虫籠の中でピクピク震えている蠍だつた。

『こんな。虫飼いがあがつて。あのクズ』

クソババーはそう言い殺虫剤をもう一度スプレーした。

『やめろー!』

俺はクソババーを殴つた。俺の拳はクソババーの顔にめり込み、クソババは数メートル飛んだ。すると、

『クソヤロウ!』

俺はクズ姉二人に折れてる左腕を何回も蹴られた。そして、クソババーを担いで出ていった。俺の左腕は腫れ上がりズキズキと痛んだ。

『糞』

俺はそう言い泣きながら蠍を左手で虫籠から取り出した。すると蠍が光だし紫色の

蠍ロボットになった。

『これは、サソードゼクター？』

そして、右手にはサソードヤイバーが握られていた。

『お前なのか？』

サソードゼクターはピローンと鳴き俺の右肩に登った。

『よし、ハハハからでるぞ』

俺はこの家から出ることを決意した。

俺はまず親父の部屋から隠し財産五十万円を取り出し鞆にいれ、親父のペンダントを首にかけ、親父が大事にしていた時計を金庫からだした。そして俺のパスポート、着替え5日も鞆に積めた。深夜2時位に俺はサソードゼクターを肩に載せ、サソードヤイバーを強く握りしめ

『いっってきます』

家を出た。